

## 猫はどう鳴くのか

東京大学教授 高橋和久

James Joyce の *Ulysses* (1922) と言えば、英語によって書かれた、という限定をつけずとも、20 世紀小説の頂点に位置づけられる作品のひとつであることに異論を唱えることは難しい。虚構と現実との関係、もしくは言語による現実の再現の可能性と限界を徹底的に追求した点で、この作品は一頭地を抜いている。いや、そうした小難しいことを考えずとも、ホメロスの『オデュッセイア』を下敷きにした結構はもちろん、1904 年 6 月 16 日の Dublin を舞台に、先行する様々のテキストのパステイシユやパロディを駆使しつつ、人間が生まれてから死ぬまでに経験することをすべて描き込んでいる一猥褻になるのも当然と言うべきか—らしい網羅性はたしかに読み手を圧倒する。

したがって敷居の高い作品ではあるけれども、天使が踏むのを懼れるところに平気で突進するのが何かの特権であるから、意を決して頁を開くと予想通り、途中で障害にぶつかる。どこに障害を感じるかは各人各様だろうが、海岸を歩く主人公の哲学的思索がたどられる第 3 挿話は観念的過ぎて、伝統的な小説の感興を求める読者は少なからずそこで頓挫するかもしれない。それならばいっそ、オデュッセウスに擬せられる主人公 Leopold Bloom の登場する第 4 挿話に進んでもいいだろう。何しろ心優しい主人公は朝の台所で、妻の分まで朝食の準備をしているという極めて小説的な舞台が用意されているのだから。

その台所に猫が姿を現して、Bloom の注意を引く。  
— Mkgnao!

— O, there you are, Mr Bloom said, turning from the fire.

The cat mewed in answer and stalked again stiffly round a leg of the table, mewing.

というのがその場面で、これに続けて Bloom がミルクをやらうと言うと、'Mrkgnao!' というのが猫の答え。

さらに、この猫はひよこを怖がるのだからお馬鹿さんだとからかう Bloom には、'Mrkrgrnao!' と反応する。これだけ繰り返されれば悟るしかないが、猫は「にゃー」(mew) とは鳴いていなかった。猫の発話(?)に続く地の文において繰り返される 'mew' が対比されることによって、onomatopoeia の、こう言ってよければ、欺瞞性が前景化される。猫の発した音は英語としては発音不可能、つまりは再現不可能でありながら、'mew' や「にゃー」はややもするとその不可能性を覆い隠し、猫の鳴き声を再現しているかのように錯覚させてしまうという事実が明らかにされる。onomatopoeia を媒介にした言語の再現(不)可能性の探求は、英語には onomatopoeia に由来する名詞や動詞が、例えば日本語と比べると、非常に多いという特徴を考えると、いっそう大きな起爆力を持つだろう。

この後、買物に出る Bloom は玄関で帽子を手に取る — 'The sweated legend in the crown of his hat told him mutely: Plasto's high grade ha. He peeped quickly inside the leather headband. White slip of paper. Quite safe.' 彼は帽子の内側にしまった紙片が「ちゃんとある」ことを確認するのだが、その前の「汗で色褪せた商標が無言で語りかける」言葉がいささか奇妙である。「プラストの高級 ha」とは何か。どうやらこれは帽子店の商標が汗で一部('hat' の 't') 消えてしまった跡らしい。ここで 'ha' は指示対象としての「帽子」との連関を放棄することによって、言葉の物質性を露わにする。言葉は透明で無重力の媒体ではない。音や字面に漂う何かをわれわれは無意識のうちに意識しているのではないだろうか。今日も言葉は消費されるのだから、できるだけ大事に使いたいと思う。寝取られ男 Bloom も白い紙片と偽名を使って女性と密かに文通をするとき、きっと言葉を大事に使うに違いない。